日二新聞

定價一匁

第十八輯

西垣文庫
特
文庫10
7356
18

特 文庫10
7356
18

京都帝国大学附属図書館

日々新聞才十八輯　　辰六月五日出板

○小田原藩より官軍諸藩隊長中へ酒肴相送度旨
市賄市用々ゝて官軍出陳先へ出役ゝ多ゝ居ゝ
江川太郎左衛門手附冨沢正右衛門へ頼越ゝ
付五々通取調ゝ由

一因州隊長二十人
一伊州同　十三人
一長州同　六　人
一備州同　二十人

帝国文庫

○小田原藩より伊州隊長へ酒肴相送り節太郎左衛門手附右之正右衛門を頼を送り口上書写

昨九八日之戦争小田原藩勝利相成り候ハ全く各藩ハ援兵ハ尽力故之儀と忝存り依之家老中より各藩ハ藩隊長方へ菓酒を上度旨ゝて取次之儀頼越り就てハ外ハ藩へも夫々申上ハ受納ま頼ハ藩之儀ハ城内ハ出張中之儀ゝ以書面申上ハ受納仕下ハハ本懐可奉存ハ以上

五月九日

伊州ハ藩

印紙用
江川太郎左衛門手附
冨沢正右衛門

○

一五月九日小田原藩家老渡辺大允ゟ何某元小川某隊長ゝて山崎下地内三枚橋ゝ上箱根宮ゝ下堂ヶ嶋ゝおいて脱走兵ゝ戦争右藩ゝ手へ脱走兵ゝ首九級ゝ得たりと

一日金峠ゝ於て戦争ゝり小田原藩ゝ手へ脱走兵の首二級ゝ得たりと

一小田原藩物頭加藤市太夫といふもの其二男浦賀与力何某の養子とゝりしゝ先頃脱走ゝ凡百人程召連

ハ隊長中概

当地窪田甚四郎方へ引越居し由右故ゟ遂ゝ加藤一
家親類不残出奔そゝ
一九八日戦争の折小田原藩の内ゝて四人戦死ゟ脱走
ゟ死骸見へざるものありとそ
一因州藩へ召捕るものの追ゝ吟味そ処軍監中井範五
郎と及殺害るハ金小田原藩ゟ相遠きき吉白状せ
しゝより九九日朝五ッ時より小田原表謹慎ある所の
本源寺と取圍たりとそ
一小田原家老渡辺大允苦戦して深手と受れども一
旦脱走兵へ一味そ吉宇へたるゝより九九日五ッ時よ

り同人宅と官軍取巻うりとそ
一九九日佐土原勢クッワの紋の旗と立半小隊小田原
宿行軍東帰せり此れハ小田原の事ゟ付江戸より甲
州へ向出陣夫より山路と越て来りし勢のよ
一小田原藩吉野大炊そ進渡辺大允両人ハ古不審の廉
ありゝ付官軍ゟて不寐番付置のよ
一小田原表ゟハ家来吉野大炊そ進渡辺大允両人仕成
そ後覚居るやうて両人詮議中護衛の士付置のよ
一長州隊長指揮かせし小田原藩兵深手の者へ手当と
して一人ゝ付金三十両宛長州藩より送りたりと又

長州勢宿陣せし内川屋といふ旅館へ手当として召
使下女どもに至るまで金一両宛与へなりとぞ
一官軍諸藩の内にて長州勢ハ温和にして軍律正敷命
令行届きたり
○
一五月晦日箱根塔ヶ沢岩崩に尤の品々捨有之定て脱
走兵の品なるべし
一白糸柄太刀　但身長三尺二寸余
是ハ白筒袖縮緬半に包み血に深き但ひらハや
もりの如く双ハ鋸の如くなりしと
一刀　七腰
是ハ何れも血に深き双鋸のごし
一陣笠　六蓋　但裏朱
一胴乱　三ツ
一服差　三腰
一短筒　一挺
一桃形雑兵兜　三刎
一長巻刀　一振
一手鎗　三筋
右ハ小田原藩にて取揚来り

一豆相近傍浦々船数取調之儀軍監三雲為一郎より談
ドクるようして夫々云付たりと
一箱根湖水の北駿州は厨辺への間道口留番所ある所
ある字千石原より於て小田原藩脱走兵と戦事ありし此
援軍として備前藩出陣官軍の内より薄手負たるも
の三人程見へうりとぞ
○辰六月は渡る廿四日は書付写
一平岡丹波事は家老に仰付い間此段は旗本は家人中
へ可申達い事
五月

○は役名は唱替に仰出いは書付写
中老　若年寄
は側は用人　は側は用は取次
奥は用人　は留守居
不勝支配　同　小普請ゝ面ゝ取扱ゝ
同並　同　並
は勘定頭　是迄は儀ゝ方ゝ　は勘定奉行
同並　同並
奥頭役　は廣敷は用人
右之通唱替に仰出い間可申達其意い事

一是迄老中支配之分以来ハ家老支配と可ス心得ハ尤
諸願諸進達物之儀ハ月番ニ中老ヘ可ス出ハ
右之通ハ旗本ハ家人中ヘ可ス達ハ事

五月